

この戒名の主が誰で何時の時代の人が判明すれば三十三観音の寄進された年代もはっきりするものと思われる。

以上気付いた点を記したが、観音信仰ならびに伊那三十三所観音については、すでに、本誌四二五号に山本慈昭氏が「下伊那の観音霊場」を発表されておられる他、郡下には笠松山、阿弥陀寺隣政寺等三十三所観音が安置されている所が多いので、これらを

調査すれば、伊那谷に於ける観音信仰の具体的な資料が更にはっきりすることと思われる。

右の外、関係資料について御存知の方は、御教示いたゞければ幸である。なお今回の調査には伊賀良小学校の酒井久江、伊藤久子の両氏に御協力をいただいたので記して感謝の意を表する。

(一九六五・一) (筆者 伊賀良小学校教諭)

大草辺の民話・伝説一

下 平 加賀雄

一 鬼の暴れる話

むかし西山の百間庵あたりから流れだす与田切川が天竜川に出合う鬼が島にたいそう暴れん坊の鬼が住んでいました。

毎年、春になって西山の雪が溶けるころや、夏になって毎日のように雨が降るころになるとこの鬼は「そうあはれだして飯沼や本郷の人たちを苦しめていました。」

あるときこの鬼が天竜川をひとまたぎに越して北山の方へ、いたすらしにいこうとしました。

飯沼の人たちがおどろいて水神さままで水行をして荒鬼を退散させようとなりました。いいあんばいに鬼は敗けて鬼が島へもどってしまいました。

けれどもよつほど力の強い鬼だったと見えて鬼が踏いで踏みつけた岩が窪んで「鬼の足跡石」ができたばかりか、そこらあたりの木や草が枯れて「枯木つ淵」になってしまいました。

それから後も村の人たちは雨がいく日も降りつづくころになると「そうらまた鬼があたけるぞ」といって水行をしますが鬼もよほどくやしいと見えて時には水行の人をさらって天竜川の下流の方へお

し流してしまふこともあります。

大草の方の人たちも鬼にあはれこまれてはたいへんだと上の方に「鬼戸」下の方に「坂戸」と二つの戸をたてて関所にしました。それで鬼はそこから下の方へ暴れてはいきません。けれどもやはり鬼もくやしいのでしょう。時々手を伸ばして戸を揺すぶるので岩がくすれて石がごろごろ落ちて、そこを通る人々をひやひやさせます。

二 種茄子のはなし

ある所にはたいそう金持の人が住んでいました。山の中から一人の女中さんが雇われてきました。気だてがやさしくてまめまめしく働くので家中の人からかわいがられていました。

秋の初めのころ、その家にとつてだいじなお客さまがきました。町にも遠いのでお客さまにさし上げるごちそうがさつそくまにあいません。

女中さんは裏の畑へいって隠居さんがいじに残しておいた種なすをもいできて料理をしてお客さまをもてなしました。お客さんは喜んで帰りましたが、あとで種茄子のなくなったことに気がついたごいんきよさんは、此の女中さんをたしなめました。

気の弱い女中さんは悪いことをしたと急に病んで自ら世を早めて死んでしまいました。

女中さんの母親が来て娘の遺骸にすがってなげき悲しみました。

金持の家の主人は、お金でも田んぼでも山でもやるからがまんしてくれといいました。母親は「人の子の親は、わが子が命にかえていとしいものとお察し下さい。金も田地もいりません。生きかえらせてください。でなければ此の子の霊が此の家に憑いて行く末あだをすることも知れません。」とかきくどきました。

それから後、この家には運の悪いことがおりおり起つて病人が出たり、ちえのおくれた人が出たりしたこともあったといえます。

三 黒牛の風三郎さま

風三郎さまは黒い牛にのって陣馬形山ふもとの黒牛の里に来てけんごな岩屋の中にこもって、ここを永住の地としました。

風三郎さまは大風が吹かないように守って、三十二の村々の稲がよく実るようにしてくれます。けれども住んでいる風穴にいたすらをされたり、獅子や笛は大きいです。ですから黒牛、谷田、神又丸尾、西丸尾の五つの村のお宮では神楽の獅子を舞いません。越後獅子も宮の入から上には登っていきません。

もし風三郎さまのお気に召さないふるまいがあったときは、あらい風が吹き強い雨が降って五日五晩やみません。そんなときには美女森の「みあえと」で、しずまるようにおまつりをすると治まってしまう。

風三郎様はまた安産を守ってくれます。だから妊婦は底の抜けたお碗をそなえておまいりすればやすやすと赤ん坊が生まれます。

お祭りの日には風袋ふうぶくろをつくります。かざぶくろといっても袋ではありません。青竹のさきを割って御幣と麻をはさんだものです。前宮にそなえて神主さんののりとを上げてから若い衆がお宮のうしろの高い松の木のとっぺんにのぼって里の方へむかって風袋の青竹をポーンと投げます。

川を越えたときは豊年で、川のこちらに落ちたときは凶年だと言われています。

四 まむし酒

それはそれは奥深い赤石山の山奥に、うんと年をとったおきなが住んでいました。どんな病気ででもなおすといういろいろの薬草を知っていました。このおきなはいつも牛に乗って山の中へ分け入り、薬草を摘んできては病む人や苦しむ人や、弱い人を助けていた。で里の人々や山の人々にまるで神さまのようにうやまわれ慕われていました。

このおきなは一管の横笛を腰に挿していて、くたびれると岩かどに腰をおろして、やおら其の横笛を吹き始めます。その唸々とした佳い笛の音が谷から谷へ、峯から峯へひびいていくとあちらからもこちらからも熊や鹿や鳥が集まってきて無心に聞き惚れていました。

した。先祖代々言いつたえて此の青ろじを大切に、いじめるよ。うなことはしませんでした。

所が、この酒屋も月が移り星が変って若い主人が世を継ぎました。この若主人の若奥さまは大の長虫嫌いだから主人にたのんで青ろじをどこかへ追ってくださいと頼みました。けれども此の青ろじは酒倉の酒のにおいが好きだと見えてまたいつのまにか酒倉へもどってくるのです。たまりかねた若主人はとうとう滑瀬をおこしてこの青ろじを切りすてました。

それから何日かたったある晩のこと、どこの者とも知れない旅の者がこの酒屋へやってきて泊りこみましたが、たいへんな酒好きで酔うと青い顔になって若主人に悪たいをつきます。

毎晩のことなので若主人もかん忍ぶくらの緒を切つてこの旅人を切り殺しました。二度と酒屋に迷ってこれないようにぐるぐるすまきにして、かたくしばりつけ人々にかつがせて山伏塚から天竜川の釜淵へあらしこんでしまいました。

気の毒だなあと見ていた人にもかついでいった人にもこれがたつてその後、おこりにかかったり、わけのわからない病気に罹ることがつき、また酒屋も、それからは子供が若死したり酒屋の繁昌がとまったり不運がつづいたりしたのでとうとう遠いよそへ引越してしまいました。

す。おきなの笛がやむと鹿や鳥はめいめいの様みかへ帰っていきま

あるとき、おきなが牛からおりて休んでいました。牛は山の草をもぐもぐとたべていました。と、そこへそんなことは知らない娘が出てきておじさんの大切な牛に噛みつこうとしました。此の時、おきなは横笛をふきました。まむしは噛みつくのをやめました。おきなはすかさまむしにこう言いました「生きものに害を与える生きものになるのじゃない。生きもののためになる生きものになるんだよ。」と、

まむしは「わたしが悪うございました。わたしはこれから人のためになることをします。私をつかったお酒を造って下さい。そのお酒を飲むと長いきがでるでしょう。」と告げました。これがまむし酒のおこりです。

大草の里おほくさの宋閑という人が、はるばるとこの山奥へいって、このおきなにあつて、その薬草やまむし酒の造りかたを教えてもらいました。今もまむし酒を造っております。

五 あおろじはだいにするもの

むかし大草の里おほくさに大きな造り酒屋がありました。酒屋はだん／＼繁昌して此のあたりで一番羽振りのよい豪勢な家になりました。その家の酒ぐらには大きな青ろじが一匹ぬし、主となって住んでいま

六 釜淵の青坊主

天竜川の釜淵に大きな鯉が住んでいました。深い淵の主です。いじめたり傷つけたりと怒って大あばれにあげられます。

あるとき鮠うなぎじまんのりょうしがなげ網を持ってこの大鯉を生け捕りにしようと思つてザブンと網をうちましたが鯉はひっかかって来ません。鯉は大あばれに荒れ狂つて田島や葛島の田んぼをたくさん流してそのままだこかへいってしまいました。

村の人は後悔してその釜淵の上に松を植えて鯉をなぐさめました。松はだん／＼大きくなって石神の松といわれるようになります。

この松のまわりを息をしないで七まわり半まわると釜淵から青坊主が出てきて「石ふむな松折るな」と言ひと言われていますが、まだ誰も青坊主を見たものは無いそうです。

七 堂ヶ萱（どががや）

小波川が天竜川に合はざる所を渡場どばといひます。このどばから鹿塩へいく道は小波川にそつてその北がわを、上ったり下ったりして崖の細道をなんぎして歩かねばなりません。小波川ぞいのきりたてたような岩を木の根につかまっていくな所もあります。おいするが坂につかえて歩きにくく「おいする坂」もあります。上からバラバラ

砂がくすれてきたり、かけた石がごろごろころがってくる所もあり
ます。大水がでると道が流されて川になってしまふ所もあります。
はらがへったり、のどがかわいたり、足がいたくなったり、病気に
かかったりする旅人もあります。

そこで、弘法さまのようなえらい坊さんが途中にある「どがかわ」とい
う所にお堂をたてて、ありがたいお経をよんで旅人のなんぎを
すくってやりました。そしてひまを見てはお不動さまの像をぎざん
でそのお堂にまつておいて鹿嶋の山の中にいってしまいました。
それから何百年もたつてから、北の方のある殿さまが夢を見まし
た。その夢に、お不動さまがあらわれて「われはお前の守り仏であ

る。徳の高いお坊さんをつかわして、りつばなお寺をたてて手あつ
くらやまいなさい。」と告げました。
そこで殿さまは、えらいお坊さんを下ガカヤへつかわしてお不動
さまを北の方の天龍川に近い所へうつしてお寺をたてました。
今でも、ねがいごとや、どうしたらよいか迷うときや、苦しいと
きや、病気のときや、そのほかなんでもねがいごとがあると、おま
いりしてこのありがたいお不動さまのごりやくをうける人々が近郷
近在からたくさんおまいりにきます。〓続〓

(筆者 中川村北林)

明治三十七年の本町っ子

高田久四郎

日露戦争があった明治三十七年には、私達は小学生であった。学
校へ行くと、先生が新聞を見て、戦況を毎日のように聞かせてくれ
る。町には応召されて行く兵隊を見る。巷では戦争の話で持ちきり
弥が上にも真剣になり、遊びにも戦争ごっこが流行った。木作りの
テッポウを肩に、蜜柑箱で背のうを作り、竹のサーベルを腰にした

銀鬼大将の指揮で、日の丸の紙旗を押し立て、前だれ掛けの少年は、隊
列をつくつて、今日は今宮、次は磐石、山伏丸と、紅白二隊に分れ
山野の崖を駆けめぐり、かんしゃく玉を鉄砲の先に取付けては打ち
合い、盛んに突撃もする、あるいは地に埋めて爆発させ、地電火と
称え、凄じい光景である。あまり真剣になり過ぎて怪我人を出した

こともあった。ついに勝負は決せず、敵は幾万の軍歌を高らかに歌
い、隊をなし、意気揚々と帰町した。

○

或日先生から話の時間に、有馬中佐と広瀬少佐が、決死隊を指揮
して、旅順港の入口を閉塞するので、運送船五艘に分乗して、港口
を目指して航進した。砲台よりいくつもの探海燈に妨げられ、猛烈
な射撃を受け、ついに三艘は途中で撃沈され、漸く二艘を目的の位
置に破壊沈没させて、ボートを御し、敵弾を避け全員わが雷艇隊ま
で漕ぎつき、九死に一年を得たと云う話を聞かされ、皆々しゅんと
し、しよげかえった。

それがあって、翌日登校すると、放課時間に誰かいい出したか、
献金の話が持ち上つて居て、あれこれ話し合った末、先生に質問す
ることになった。先生はお金の事であるから、お父さんとお母さん
に相談してみるが良い、学校としては奨める訳ではないし、止める
訳でもない、参考迄に云つて置くが、小使を溜めするも良いが、
献金の受付は一円以上と極められているからそのつもりで、又は何
人かが一緒にするのもよいと教えられた。

今日は土曜日なので、戦争ごっこの仕度をした町っ子は、元気で
集まつて来た。そこで銀鬼大将が一同に呼びかけて、みんなに相談
があるんだがと、真面目な顔でい出した。『みんなも知つとる通り
戦争が始まつたら、そいだもんで勝つためにはお金が沢山いるっ

ちゅうで、みんなでお金を寄付したいと思うがどうだ。』皆はかん
とした。『それでだ、皆が小使を十銭ずつ出し合つて、そのお金を
菓子を買入れて、町内を一軒一軒廻つて買ってもらい、その儲けを
献金したいと思うのだがどうだ。』『そりゃいいい、賛成。』
『そいじゃ今日は戦争ごっこは止めにするで、みんな鉄砲を置いて、こ
のことを家へ話して十銭ずつもらつてこいよ。』立所に皆十銭握つ
て集まつて来た。そいじゃお金はでまえの袋に入れてつてくりよ、
うむと云いながら数える一円ある、さあお菓子屋へ行くでみんな
来い。兵隊ごっここのときのご面相と違い莞爾して付添い、二丁目の
餅屋へ行く。おらあ達でお菓子を売つて、儲けを陸・海軍へ寄付す
るんだで売つておくん、よしよし安くしてやる、なにがいいかな
あ、ここにあるおこしがいいか煎餅がいいか、いくらするの、どっ
ちも一斤十一銭(當時は一斤が百六十目であった)それじゃあ両方
で九斤おくん、いくらに売ればいいん、十三銭売らだ、ばい箱
を貸しておくんなんやれ、袋の中の一円で一銭お釣りをむらい、二
つの箱に入れて皆でかわるがわる持つて来た。

すぐ売るか、そうせまい、横町の吉本はどうする、そうだなあ、
ここは兵隊に行つて居るで、それでも聞いてみよやれ、買つてくれ
るつてな、どっちがいいか見てむらえ。隣りは田中屋の餅屋だ、戦
争に儲けを寄付するんだで買つてくれんかな、よしよし一斤むら
いは十三銭。角は稲葉屋の魚屋だ、お菓子を買つておくん戦争に

られていました。

藤兵衛のそばの蔵は「番場のお蔵」といわれていました。十二月までに蔵に集められた年貢米は竹佐代官所の指示で片付けられ番場の蔵には四石八斗五升だけ残ったのでしょう。この分は庄屋の責任で三、四里の範囲に売払わせ十月までに片付け、十一月には代官所から「皆済目録」が出るようになります。この年の皆済目録は見つかりませんので二年前のものを示しますと、

覚

一米貳百八拾三石七斗八升八合

本途口米

一 金三両三分永式百三拾七文五分

小物成共

右は去年より御年貢米本途・口米・小物

成并臨時金如斯請取之令皆済者也

享保十二年未十一月

任高須 小 勘左衛門 ⑤
浅 武左衛門
虎岩村

庄屋 中

竹佐代官所には一人の奉行がいて、一人は高須へ行っていて、一人が署名捺印するのがなわしでした。小田勘左衛門が十二年末にも竹佐にいたことがわかります。(平沢清人)

第一四回古文書クイズ

御蔵米の事答案結果

◎優位 松川町岩崎清、同下井孝、阿島黒川良一、小野小野前八、伊久間吉川興、同大原茂久、駒場原隆天諸氏、以上に本文の複写古文書一部づ、贈呈
◎良位 天龍院今村始次、立石前沢庵石、部奈北林英一、上飯田原武司諸氏
◎可位 小野川熊谷鋭三郎、川路今村長治、阿島三石幹雄、上村宇佐美虎之助、立石久保田正雄諸氏
締切後到着のものは採用出来なかった。優位は全解又は一字位の誤読、良位は三字より五字まで、それ以下十文字までを可位とした。今後も辛抱強く続けられたい。

つつまれて、各地とも猛暑になった。この暑さで地形的日射昇温によって、午後は熱雷が発生し雷鳴となった。この雷が局地的に強まって飯田市山本長田平と、阿智村会地春日地籍にこの季節としてはまことに珍しい強い強風と降雹があり、農作物に若干の被害を与えた。

台風二十号

(九月二十五日)

九月下旬初めころから次第に本州に接近して来た台風二十号は二十四日九州南部に上陸、その後超スピードで中国、近畿、日本海、東北地方を経て二十五日午後には太平洋に去った。当地方はこの台風の影響で二十四日夜から秋雨前線の活発化にともない強雨となり二十五日は台風が当地方西方通過にともない風台風となつて南の強風が吹きまくり各地に家屋、道路損壊、小河川はらん、果樹園など大きな打撃をうけ、中でも伊那地方にかなりの被害が出た。とくに胸ヶ根市赤穂の上水道の水源地に大田切川の奔流した濁流が流れ込み使用不能となった。このため松本自衛隊の浄水車や隊員が急援にかけつけたりして、被害は各所におよんだ。

木曾駒冬山の遭難(十一月下旬)

十一月は近年にない寒い晩秋であつたので、山はすでに冬山に入つていた。十一月は地上では晩秋で、山は初冬といつても山の気象はきびしい。これを軽視したり、また二十二・二十三日の連休を利用して無理強行したり、完全な装備や、体調不十分であつたりしたハイタ気分での登山は、冬山のきびしさを忘れた無謀登山であり、

この冬山の悲劇が木曾山脈駒ヶ岳で下旬に二件、三名の犠牲者を出した。これは地上でも例年にない寒い月であつたので、山は下から眺めた以上に雪が多く、完全な冬山登山装備でなくては、遭難が出てないのが不思議くらいである。四〇・一・一五

(筆者 中川村葛島柏原)

大草辺の民話・伝説二

下 平 加賀 雄

八 朱一貫金千両

南の方の山にある殿様がいました。大きな舟を使って年貢を取りたてたりしたので村人や山人にうらまれるようになりました。それでこのときが国へ帰る途中、おちあいという所の崖道で、上の方から石をころがされたり、根こぎにした大木をおとされたりして、とうとう殿様さまは死んでしまいました。殿さまのお城の近じよでも

領民がそうどうをおこしてあふなくなつたので、奥がたや、お姫さまは恐ろしくなつて逃げだしました。

そのときお姫さまは、けらいに「朱を一貫、お金を千両」持たせてにげまわりました。いつか世の中がおさまつたら掘り出して役にたてようと思つて、それを土の中にうずめて、ついできた「うづき」の杖をたてておきました。

うづきの杖は、さかさに地面に突きささっ

たまま根がついて芽が出ました。それが「さかさうづき」だそうです。その後、この逆さうづきをさがしてそを掘れば朱が一貫、金が千両出ると伝えて、村の人たちはさかさうづきの木をさがしたが、とうとう見つかりません。またそのときのお姫さまも、どこへいってしまったかわかりません。そのかわりに、殿さまやお姫さまがたつてはいけなさと、この村では、ほうぼうに

〇〇八階さまをおまつりしてあります。

九 銭のお不動さま

大草の里の東の方に大嶽山があります。そのまた上の方に銭という小さい村があります。その経塚平にむかしお寺がありましたが、ある年の大雨に川くずれがあつて

お寺が埋まってしまったそうです。
そんなことがあったのも忘れてしまいう
ら何十年も何百年もたちました。
この村のお百姓さんが馬を曳いて山の草
を刈りにもっと奥の方へいくのですが、そ
の行くさ帰るさにここを通ると、馬はきつ
と一度はここで立ち停まって、さも慥しそ
うに「ヒーン」といなくそうです。人
々はふしぎに思っておりましたが、べつに
氣にもとめてはおりませんでした。
ところがそのあたりで毎晩、光りを放つ
ようになりました。村の人たちはたいそう
不思議に思っていく人かそこを掘って見
ると小さいお不動さまがあらわれたのであ
りがたうことだ、もったいないことだと話
しあつて立派なお堂をたてて其のお不動さ
まをまつりました。
このお不動さまは馬を守ってくださいま
す。馬を曳いておまいりするとその馬は山
からあれこれんだけかをしり、病氣にか
かりません。ですからこのお祭りには北
の方には殿島や出原、東の方は杉島や大河原
南の方は牛牧や阿島から馬を曳いてお参り
にきた人がたくさんあつたそうです。

一〇 くだのはなし

むかし大草の里の由緒ある家の娘が江戸
の大奥に御殿女中に召し出されました。み
めかたちも美しく気だてもすなおだった
のでおつねさまからかわいがられていま
した。
ところが国もとでは母親が重い病氣にか
かつて今日明日も知れないくらいになつた
のでおいとまを願つて大草へ帰つて親をみ
とるこになりました。
その時大奥の上うが

「信州の大草の田種」を演じてわかれの
かたみに見せてはくれまいかと所望しまし
た。娘はすなおにうべなつて紐がすりの着
物を赤いたすきをかけ、すげの小がさの紐
をきりりと結び、手つこう甲掛もかいがい
しく、大奥の背だたみの上で手さばきも見
ごとに田植明に合せて田植の所作を演じ
ました。なみいる女中衆の首尾もめでたく
やがて国へ帰るときにはたくさん小判の
下されものをいだけて大草へ帰つてまい
りました。

あいたい娘にもあい、手あつみとりに
一時は快くなるかと思われましたが、心の

安心が氣のゆるみで、やがてがっくりなら
なつてしまいました。
娘の叔母は彼の深い女で娘の持つて来た
小判に目をつけこれをうまくだましとり
さらにしんしょうをよくしようとなくらん
で、くだをかいました。しんしょうもふえ
ましたが、くだもふえました。中々みから
沖田、沖田から町、町からまぜぐちへとく
だは幾年かの後にはすんくふえました。
とりわけ、おこうしんさまの森あたり
は数も多くまりました。さて、どういうわ
けか、その家のしんだいもそのころから左
まえにかたむいていきました。おこうしん
さまの森のほこをたててお祭りをしても
駄目、四つ宮の大木に封じこんでも駄目、
とうとうその家はつぶれてしまいました。

一一 杖でついた水

弘法さまのようなえらいぼうさんが馬鹿
へいくときどきガカヤの四徳渡、龍沢のみち
を通らすにあるとき天白原を通り池の平を
過ぎ、ざんごうへ登る山道を越しはじめま
した。
夏のこと、日がかん／＼照つて暑さは
暑し、のどがかわいてしょうがありません

けれどもどこらあたりには水の出る泉も川
もありません。
お弟子のお坊さんがまいってしまいまし
た。師の坊はかわいそうになつて、ついで
いた杖でトンと地面を突いたらきれいなつ
めたい清水がこんこんとわきだしました。
この山の下の方を池の平とよぶようになり
ました。(筆者 上伊那郡中川村北林)

三河町と信濃町

大沢 和 夫

昨年八月愛知県北設楽郡津具村の夏目一
平さんをお訪ねした。夏目さんは熱心な郷
土史研究家で本部へもたび／＼調査に來ら
れた方で長者の風格をもつて居られる。自
宅の一側に郷土館を自費で建て、民具一六
〇〇点以上を蒐集し、更に考古学上の遺物
も多く陳列し奥三河には欠く事のできな
い研究家と言えよう。

夏目さんの御宅にあった古文書の写真の
中に、根羽境の松原山に関する山論のもの
があった。根羽と津具とで大いに争つて始



局はその山が幕府の官林となつたいきさつ
を記したものであるが、その一つに次の様
なものがあつた。
承応二年古文書写
一、三河津具村の松原山ヲ信州根羽村の百
姓、他国ヨリ相・木引共大勢雇廻、御法
度之檢不並根・つが此山ニテ平ナメシニ
伐採、迷惑仕候事
一、右之山境之儀つ、みが頼より東ハ大矢
管ト申処、つつみが頼より西ハ井ノ本ト
申大境ニテ御座候、古権現様三州ニ被成

御座候、信州は信文領地ニテ御座候、權
現様ト信安ト御取合御座候二付、三州へ
信州ノ百姓不通、依夫信州萬事ツマリ申
候。信州ヨリ三州へ申越候ハ両国ヨリ境
目へ出合商ヲ仕度旨申二付、つつみヶ瀬
と申処ニ小屋掛仕住リ三河町と信濃町ト小
川ヲ隔テ罷有、信州ヨリ出候麻餅ニ穀物
三州へ買取、又三州ヨリ出候木綿餅に塩
・茶信州へ売申二付、此所ヲ出合小屋ト
申候、此場所四方隠無御座候事
(以下略)

津具の松原山へ根羽村の
百姓が伐採入を連れて来て
良木を切り倒して大いに迷
惑しているが、古くよりつ
つつみが頼が境であった。そ
の証拠の一に家康と信玄の
相争つた時に、この三信の
境の小川をへたてて小屋掛
けをして三河町と信濃町と
名づけ信州の麻・穀物と三
州の木綿・塩・茶とを交換
したという事実があるとい
うのである。